

シンポジウム要旨

シンポジウム「歴史上の人物を描くフィクションの想像力をめぐって」趣旨

シンポジウム発起人 中 垣 恒太郎

虚構の物語にて歴史上の人物を作中に登場させることで物語に信憑性をもたせることができる。あるいは、いわば、「二次創作的」想像力とでも称すべき、スピノフの物語では、歴史の裏側にまつわる想像力を駆使した仮想の物語もまた、虚構の奥深さを実感させてくれるものだ。本シンポジウムでは、文豪スタインベックが伝説的英雄を物語化した試み、現代作家が描く「評伝を装う自伝を装う評伝を装う小説」という文学上の実験性を追求した作品、そして、作家自体をキャラクターとして物語中に登場させる SF ファンタジー物語における表象などを具体的にとりあげ、「歴史上の人物を描くフィクションの想像力」について展望したい。虚構における歴史のあり方、歴史と虚構の融合、物語論やジャンル論なども主要な観点となる。

ジョン・スタインベックの描くメキシコ革命の伝説的英雄エミリアーノ・サパタ

山 内 圭

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-1968) は、1952 年 20 世紀フォックス社が封切った映画 *Viva Zapata!* (『革命児サパタ』) の脚本を書いた。また、それとともに彼は “Zapata: A Narrative, in Dramatic Form, of the life of Emiliano Zapata” という物語を書き残し、それは、映画の脚本とともにスタインベックの死後、1975 年に *Zapata* として出版されている。本発表では、なぜスタインベックがメキシコ革命の英雄的人物であるエミリアーノ・サパタ (1879-1919) に惹かれ、物語および映画の脚本を執筆したのか、また「民衆を率いる者」であるサパタがスタインベックによってどのように描かれているかを、Edgcumb Pinchon が執筆した *Zapata* (1941)、John Womack, Jr. 執筆の *Zapata and the Mexican Revolution* (1968) 等も適宜参照しながら検討していく。また、スタインベックの作品で革命的要素を含む *In Dubious Battle* (『疑わしき戦い』1936)、*The Grapes of Wrath* (『怒りの葡萄』1939) に描かれる革命家的人物との比較も試みる。

評伝を装う自伝を装う評伝、そして自身のモデルに憑く吸血鬼

——Joseph O'Connor, *Shadowplay* (2019)

岡 田 大 樹

アイルランドの作家 Joseph O'Connor (1963-) の *Shadowplay* (2019) は、*Dracula* (1897) の作者 Bram Stoker (1847-1912) の評伝的小説である。Stoker は生前、作家というより劇場の支配人として生きた人物であり、本作は Stoker のこの側面を描きながら、実在した人物の生涯を物語化するという行為について幾重にも仕掛けを忍ばせる。

まず本作は大部分が、晩年の **Stoker** による自伝的小説の原稿として書かれている。だが **Stoker** は一人称でなく三人称で執筆しており、本作には評伝を装う自伝を装う評伝を装う小説とでも表現すべき捻じれが生じている。

また本作は、当代の名優 **Henry Irving** (1838-1905) の死をひとつの節目として描いており、晩年の **Stoker** による **Irving** の評伝としての側面ももつ。劇場運営に勤しむ彼らの経験を、当時まだ書かれていなかった *Dracula* のテキストに重ねて語るアナクロニズムが、本作の語りの最大の特徴となる。

こうした書法が題名に示された二重性の意識、また演劇行為と呼応することにより、本作は *Dracula* というレンズを通して自身の人生を再考する晩年の **Stoker** を描き、実人生と物語の関係を問い直している。

作家が登場人物になるとき——ヘミングウェイをめぐる物語の想像力

中 垣 恒太郎

Ernest Hemingway (1899-1961) は、作家像がフィクションの登場人物として用いられる「二次創作」的物語の中でも際立った存在である。**MacDonald Harris**, *Hemingway's Suitcase* (1990) および **Joe Holdeman**, *The Hemingway Hoax* (1991) は共に **Hemingway** の当時の妻 **Hadley** がパリで **Hemingway** の未発表原稿を入れていたスーツケースを盗まれた逸話に基づき、前者は「その失われた原稿がもし発見されたとしたら？」をめぐる物語であり、後者は **Hemingway** の贋作を試みる **Hemingway** 研究者を主人公にした多元宇宙 SF ものである。いずれもヘミングウェイの文体模倣による創作が挟み込まれるところが小説の見せ場となっている。あるいは、**Woody Allen** による映画 *Midnight in Paris* (2011) は現代に生きる映画脚本家である主人公が妻とパリを訪れている際に 1920 年代にタイムスリップし、**Hemingway** をはじめ、**F. S. Fitzgerald**, **Gertrude Stein** ら憧れの作家たちに邂逅する。「歴史上の作家・芸術家に時空をこえて、もし会うことができたなら？」をめぐるファンタジー的要素が物語の魅力の根幹にある。

Hemingway は小説や映画のみならず、音楽、絵画、マンガを含むあらゆる文化芸術の想像力の源泉として機能してきた。ポピュラーカルチャーにおける **Hemingway** 像の変遷を概観した上で、**Hemingway** が物語において重要な役割をはたしている作品を題材に、その想像力の源泉を探る。

研究発表要旨

『オリент急行の殺人』におけるイスタンブールの名称

藤 田 晃 代

アガサ・クリスティ (**Agatha Christie**, 1890-1976) によるミステリーの傑作『オリент急行の殺人』(*Murder On the Orient Express*, 1934) は、作者が滞在中のイス

タンブールで執筆され、各国語に翻訳、映画化もされるなどたいへん有名な作品であることはいうまでもない。本発表では原作を読み込むことで、作中で言及されるイスタンブールの三つの名称（Stamboul, Constantinople, Istanbul）を分析する。登場人物たちの会話では当時欧州で広く用いられていた名称である Stamboul が繰り返し使われる一方、旧称の Constantinople は四回しか使われず、作品の発表当時すでにトルコ共和国が公式名称として決定していた Istanbul に至ってはオリエント急行列車の行き先表示にするされるのみである。このこともふまえて当時の欧州から見た都市イスタンブールについて考察する。また、作中において名探偵エルキュール・ポアロ（Hercule Poirot）による乗客への聴取のうち、約半分はフランス語で行われていることを指摘し、作品発表当時の欧州ではいまだフランス語が優勢であったこと、台頭するアメリカ英語と対するイギリス英語という言語状況があったことを論じる。

最小距離に基づく語順決定

齋 藤 章 吾

英語には、語順に関わる様々な規則や傾向が存在する。例えば、修飾語が被修飾語に先行し（e.g. long sentence）、修飾句が被修飾句に後続する（e.g. sentence written in English）という規則や、主語位置に重い要素を置くことを避ける（e.g. That Taro speaks English is surprising < It is surprising that Taro speaks English.）という傾向が存在する。本発表では、英語の語順に関わる規則や傾向に対して、「関係性を持つ要素同士を最小距離に配列する」という語順決定原理に基づく説明を試みる。具体的には、「統語的に結びつく句やその内部の主要部を隣接させる、または、可能な限り近い距離に配列するような語順決定が行われる」と考える。さらに、この語順決定が義務的な規則となるか、随意的な傾向になるかは、語順決定要因の強さや音韻的現象（e.g. 韻律句形成）との相互作用によって決まると分析する。本発表では、上記の修飾-被修飾関係や主語に課される重さの制約の他にも語順に関わる複数の事実の説明を試みる予定である。

「高く昇って一点へ」における理念の現実の出来事への投影

加 藤 良 浩

フラナリー・オコナーは、ティヤール・ド・シャルダンの著作『現象としての人間』に共鳴し、「高く昇って一点へ」を書くことを決意している。創作にあたって彼女は、ティヤールが提唱する概念と、彼女が住む南部で起こっている現実の出来事と結びつけることを試みたという。『現象としての人間』では、ひとたび思考を備えた人間は意識の上昇という形でヌースフィア（叡智圏）へ向かって進化しており、やがてその進化は究極の地点である「オメガ点」に達すると述べられている。また、「高く昇って一点へ」の結末部分では、主人公ジュリアンの母親が行なった黒人の子供へ

の行為が侮辱と受け止められ、その子供の母親である黒人女性からハンドバッグで殴打され地面に倒れて意識を失う場面が描かれている。この出来事は、公共の乗り物における分離を定めた州法に対する当時の最高裁の違憲判決を背景としたものと言えるが、本発表では、この違憲判決に至るまでの歴史的な経緯やそれに関連してなされた主張や思想について検討した上で、作品中で描かれる出来事に『現象としての人間』の中で提唱される理念がどのように投影されているのかについて考察することにした。